

3books

人それぞれに本の読み方はあるだろう。
必要に迫られる読書、楽しく心に潤いを与えてくれる読書……
企業人にとっての読書の存在とは。

◎今月の選者

黒川 清

日本学会議会議長

『通貨燃ゆ』

(谷口智彦著、日本経済新聞社)

『アメリカ外交』

(村田見嗣著、講談社現代新書)

『岩倉使節団という冒険』

(泉三郎著、文春新書)

日本の外交政策が欠く俯瞰的な視座

ロンドンのオリンピック招致決定翌日にテロに見舞われながらも、グレンイーグルズG8サミットはテロ、アフリカ等について一定の成果をあげ、地球温暖化も人間の活動によるところが大きいとブッシュ大統領にも認めさせた。EU統合への赤信号がともるなか、ブレア首相の積極的な国際的指導力が評価される一方で、第2期ブッシュの強力政権はアメリカ「一極構造」「一極支配」ではない)のなか、国内外の政策を進める。日露戦争終結から100年、太平洋戦争終結から60年、そして日経最高値のバブル頂点、天安門事件、ベルリンの壁崩壊の平成元年から16年、日本は急速に変動する国

際動向への対応に苦慮している。

国際通貨が英ポンドから米ドルになった1944年夏のブレトンウッズ協定は国際通貨基金(IMF)、世界銀行を生んだが、これらが米国で「真珠湾」と同時に構想されていたとはわれわれ日本人の想像を絶する。当時の米國務長官ハルの「ハル・ノート」(1941年11月末)が日米開戦を誘発したとすると、1941年7月末の「ハル・ノート」は第2次世界大戦の英国を完膚なきまでに打ちのめした。1971年8月15日(なぜこの日なのか)のニクソン演説「金―ドル交換停止」へのプロセスと、ショックの大きさ、そして20世紀後半、冷戦構造下のアメリカの

ドイツ、英国等欧州への対応、対アジアと日本戦略、プラザ合意等を歴史的、俯瞰的に見ると、政治と通貨と経済は密接な国際権力構造のなかで明白な形で連動し、国際社会を動かしているのが見える。これらをかきわめて深く掘り下げて書き込み、極めて質が高く、興味をそそられる書が『通貨燃ゆ』である。

著者の谷口智彦氏とは数年来のお付き合いだ。日経BP社の主任編集委員、海外での特派員、大学や研究所のフェローの経歴をもつ一級の国際政治経済研究者だ。8月2日付で外務副報道官に。好人事である。わが国の政治経済学の弱さは、国際政治史的な視点から国家政策、国際通貨政策を論じ、政策立案する能力や国際政治的戦略性の無さを反映している。この状況は今も変わっていない。これが現在の日本の東アジア政策に限らず、国際戦略と政策にも現れている。手詰まり感がただよう。そういう時は感情的なポピュリストが出てくるのは歴史の教えるところである。

米国の外交政策はどのような歴史を持ち、どのように動いていくだろうか。いくつもの著書があるが、『アメリカ外交』は20世紀の米国外交と戦略の背景と見方を示して興味深い。冷戦下での政策についてはかなり理解されていると思うが、最終章はこれからの日本の課題を示して興味深い。最も興味をひく箇所のひとつは、私が以前にこの欄で紹介した朝河貫一の『日本の禍機』

(平成16年2月号)、また福沢諭吉(平成17年2月号)の外交についての言葉を引用しているところであろうか。日本の外交政策・安全保障政策には大局観が無いのであり、「総じて、日本の世論は、日本の不作為(たとえば、自衛隊のイラク派遣の中止やその撤退)が国際社会に与える悪影響には鈍感で、作為(例えば、日本政府の対米交渉能力)については、その肯定的影響力を過大評価しがちであるまいか」。だが「実際には、日本の不作為は予想外に大きな否定的影響を与えるが、日本の作為はその期待ほど大きな肯定的影響を持たない」と指摘する。思いついた節がありはしないか。

それにしても明治維新の日本のリーダーはすごいことをした。維新

直後の明治4年、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文等の政府首脳を含んで21カ月にわたって米欧を視察した岩倉使節団。なぜ政変にならなかったのか。最初にサンフランシスコ、そしてワシントン到着後に大久保と伊藤が鉄道と船で日本と往復することになり、使節団が当地に5カ月滞在したこと、またヨーロッパの各訪問先の人々と社会の特徴を捉える鋭い観察力等、驚きの連続を読んで楽しいのが『岩倉使節団という冒険』である。それにしても吉田松陰の「一国に居ついたらまなのと、天下を歩き回るとでは、人の愚賢は狭い日本の中でもかけ離れている。まして世界においてをや」は、今の日本でも、いや今の日本にこそ当てはまるのではないか。



●『通貨燃ゆ』(谷口智彦著、日本経済新聞社) ●『アメリカ外交』(村田見嗣著、講談社現代新書) ●『岩倉使節団という冒険』(泉三郎著、文春新書)